

三決死矣而不死 二十五回渡刀水
五乞閑地不得閑 三十九年七處徒
邦家隆替非偶然 人生得失豈徒爾
自驚塵垢盈皮膚 猶餘忠義填骨髓
標姚定遠不可期 丘明馬遷空自企
苟明大義正人心 皇道奚患不興起
斯心奮發誓神明 古人有云斃而已

述懷（藤田東湖）

三たび 死を 決して 而も 死せず

二十回 刀水を 渡る

五たび 閑地を 乞うて 閑を 得ず

三十 九年 七処に 徒る

邦家の 隆替 偶然に 非ず

人生の 得失 豈 徒爾 ならんや

自ら 驚く 塵垢の 皮膚に 盈つるを

猶お 余す 忠義の 骨髓を 填むるを

標姚 定遠 期す べからず

丘明 馬遷 空しく 自ら 企つ

苟も 大義を 明にして 人心を 正さば

皇道 奚ぞ 興起 せざるを 患えん

斯の 心 奮発して 神明に 誓う

古人 言える 有り 斃れて 已むと

解説 東湖が水戸藩小石川藩邸に幽閉されていた時、自分のそれまでの人生を回想し、自分が果たすべき役割と、それに対する自分の考えなどを詠じた詩。

語釈 ※決死 死を覚悟する。 ※矣 漢文の助字。 である。 くだなあ。 くだらう。

※刀水 利根川。 ※乞閑地 閑地を乞う。 辞職を願ひ出ること。 ※隆替 栄えることと衰えること。 ※得失 損益。 ※徒爾 くだなこと。 ※塵垢 ちり、あか。 ※忠義 忠義を骨髄 天皇に対する忠義が明確に強調されている。

※標挑 霍去病のこと。 前漢の人。 しばやいさま。 ※定遠 後漢の班超のこと。 ※不可期 期待出来ない。 ※丘明 姓は左、名は丘明。 ※馬遷 前漢の史家・司馬遷のこと。 ※空自 企 必ずしも望み難いことではない。 ※大義 人の守るべき道。 ※皇道 天下万民のための政治。 ※神明 神。 ※古人 有云 諸葛亮の出師表。 諸葛亮の出師表は誠忠の情の溢れるもので、これを読んで泣かない者は人に非ずとまでいわれたもの。

通釈 自分は死を覚悟した事が三度あるが、死なずにすんでいる。 また、利根川を渡って、水戸と江戸を往復すること、二十五回に及んだ。 閑職につきたいと願ひ出た事も五回あったが許可されなかった。 また、三十九歳になるまで、転居も七回になる。 色々考えて見ると、国の盛衰興亡は偶然ではなく、臣たる者が職責を果たすことに、力を尽くすか尽くさないかである。 人生の得失も自分の信念を貫くかどうかにかかっている。 そう信じて、身を挺してきたが、今は幽囚の身となり、かの柳宗元が、逆境の中で詠じた、（一たび皮膚を搔けば、塵垢に満つ）という境遇と全く同じになった。 蘇東坡の（道理心肝を貫き、忠義骨髓を埋む）という語のように、主君に対する忠義は、骨髓を埋め尽くしている。 この幽囚の身では、自ら陣頭に立ち外敵に立ち向かうことは不可能であり、そこで曲直を明らかにする史書を著わしたいと考えている。 大義を明らかにし、人心を正すならば、国の政治が正道になり、国運が再び盛んになるであろう。 この一念を奮い起こし、貫徹することをお祈りして誓うものである。 かの諸葛孔明も（発れて後已む）と言っているではないか。